

I. 導入

おはようございます。先週の個所では、アテネでパウロが哲学者たちに語っていました。この後、パウロはコリントの町を訪れます。アテネには、ギリシャ神話の神々を崇拜する信心深い人や、あらゆる思想について延々と語り合う哲学者がたくさんいました。コリントにも偶像は数多くありましたが、アテネとは対照的に船乗りがたくさんいる港町でした。



現在の地図を見てみましょう。ギリシャ南部は半島になっています。ペロポネソス半島は、四国より少し大きいほどの面積です。本土とは細い地峡でつながっています。コリントの町は、この地峡の最も幅が狭い部分辺りにあります。エーゲ海からイオニア海への航海は、全長6.4キロメートルのコリント運河を通れば格段に距離が縮まります。この運河の建設は紀元一世紀に始まりましたが、工事が何世紀にもわたり中断され、1893年によく完成しました。



運河は比較的新しいものということになりますが、地峡を渡るルートは古くからありました。その昔、整備された敷石の軌道を進む台車があり、それに船を載せて運びました。半島の南をぐるっと回るより時間と距離の短縮になるのはもちろん、安全なルートでもありました。南側の海は荒く、危険だったからです。この敷石の跡は今も遺跡として残されています。ディオルクスと呼ばれたこの軌道により、コリントはふたつの海をつなぐ港町へと発展しました。



パウロの時代、コリントは人口20万人以上の大都市でした。そこには多くの遺跡が残されています。最初の写真は、上空から見た町の様子です。次は、主要な遺跡の写真です。コリントには売春や暴力をはじめあらゆる悪が横行しており、ローマ帝国中にその噂は知れ渡っていました。



大勢の船乗りがひっきりなしに町を出入りしていたことも、コリントの問題に加担していたでしょう。しかし、不品行の中心となっていたのは、愛と快樂、子孫繁栄と豊穡の女神アフロディテを祀った神殿です。この写真には、コリントの町を見下ろす丘の上にあった神殿の遺跡が映っ



ています。町の住民も、町を訪れた船乗りも、1,000人もいたといわれる神殿娼婦のもとへどこぞって丘を登りました。コリント人はこれをアフロディテ崇拝と呼んでいました。パウロはローマの信徒への手紙をコリントで書いたと推測されます。ローマ1:18-32にある不品行に対する激しい非難は、パウロがまさにコリントで目にしたことについてだったのかもしれませんが。

アテネで、使徒パウロはあまりの偶像の多さに心を痛めました。コリントでは、人々のふしだらで放縦な様に言葉を失ったに違いありません。では、使徒18:1-17を読んで、何が起こったか見てみましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録18:1-17, 新共同訳)

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。18:2 ここで、ポントス州出身のアクラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、18:3 職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。18:5 シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証した。

18:6 しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」18:7 パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。18:8 会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。18:10 わたしがあなたと共にいる。だから、あなを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」18:11 パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

18:12 ガリオンがアカイア州の地方総督であったときのことである。ユダヤ人たちが一団となってパウロを襲い、法廷に引き立てて行って、18:13 「この男は、律法に違反するようなしかたで神をあがめるようにと、人々を唆しております」と言った。18:14 パウロが話し始めようとしたとき、ガリオンはユダヤ人に向かって言った。「ユダヤ人諸君、これが不正な行為とか悪質な犯罪とかであるならば、当然諸君の訴えを受理するが、18:15 問題が教えとか名称とか諸君の律法に関するものならば、自分たちで解決するがよい。わたしは、そんなことの審判者になるつもりはない。」18:16 そして、彼らを法廷から追い出した。18:17 すると、群衆は会堂長のソステネを捕まえて、法廷の前で殴りつけた。しかし、ガリオンはそれに全く心を留めなかった。

III. 教え

パウロがコリントに到着してまもなく、アキラとプリスキラに出会いました。ふたりも最近この町にやってきたばかりでした。ローマ皇帝クラウディウスがユダヤ人をすべてローマから追放したため、引っ越してきたのです。使徒18:3にはこうあります。「職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。」当時、ユダヤ人男性は皆、ユダヤ教指導者も含め、手に職をつけなければなりません。パウロはここで仕事をする必要にせまられました。元々の職業がテント造りだったので、自然と同じ職業の人々に加わりました。アキラとプリスキラはすでにイエスを信じる信徒だったのでしょう。この後、ふたりはパウロと親しくなり、教会の指導者となります。



コリント到着後、パウロは自分で働いて生活費を稼ぐという手本を示しました。今日、宣教の働きをしながら一般の仕事をして生活費を稼ぐ宣教師が世界中にいます。それぞれ職業は、ビジネスマンや英語教師、コンピュータープログラマーなどさまざまですが、皆テント造り宣教師と呼ばれます。パウロの例に倣っているからです。

パウロは必要に応じて自分の生活費を自ら稼ぎましたが、このやり方に制限があることも私たちは知っておくべきです。使徒18:4にはこうあります。「パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。」アテネでは、パウロは安息日に会堂で語り、他の日は毎日広場に行って、聞いてくれる人誰にでも語りかけました。一方コリントでは、パウロがみことばに従事できたのは安息日だけだったようです。少なくとも始めはそうでした。平日はテント造りに忙しかったからです。テント造り宣教師は、宣教の働きをする時間を見つけるのに苦労します。こういうわけで、パウロは他に支援がまったくない時のみ、テント造りをしたと考えられます。

使徒18:5「シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証した。」シラスとテモテがコリントでパウロに追いつきました。ふたりが合流すると、パウロはテント造りをやめて、みことばを語ることに専念しました。パウロがそうできたのは、他の教会からパウロに宛てられた支援献金をふたりが持ってきたからです。使徒18章でははっきりとは書かれていませんが、コリント第二11:8-9a を読めば明らかです。パウロは、コリントの信徒たちに宛てた手紙でこう言っています。「11:8 わたしは、他の諸教会からかすめ取るようにしてまでも、あなたがたに奉仕するための生活費を手に入れました。11:9 あなたがたのもとで生活に不自由したとき、だれにも負担をかけませんでした。マケドニア州から来た兄弟たちが、わたしの必要を満たしてくれたからです。そして、わたしは何事においてもあなたがたに負担をかけないようにしてきたし、これからもそうするつもりです。」

パウロは明らかに支援献金を受け取っており、資金が少なくなった時のみテント造りをしていたと思われます。パウロがテント造りをして働いたことから得る教訓があります。それは、宣教師は必要なら何でもする心づもりでいなければならないことです。支援が十分にあるなら、



伝道に専念すればよいでしょう。しかし、支援が足りなくてもあきらめないことです。新たな支援が届くまで、自分のできる仕事をしましょう。

ルカは、シラスとテモテが支援献金を持ってきたことを記しませんでした。同様に、このときのパウロの気持ちも記していません。後にパウロがコリントの教会に手紙を書いたとき、このようにコメントしました。コリント第一2:3。「そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。」エルグレコがパウロの悲しげな顔を描いたとき、この個所を思い浮かべていたのでしょうか。

私たちはパウロのことをいつも大胆で勇敢な働きをする人だと思いがちです。けれどもパウロ自身は弱くて不安な自分の姿を描いています。コリント到着後、パウロはずいぶん落ち込んでいたと考える聖書学者も多くいます。パウロは鞭で打たれ、投獄されました。人から非難を受け、拒絶されました。アテネでは思わしくない結果にがっかりしたでしょう。アテネからコリントまでは、徒歩数日の長い道のりです。たどり着いたとき、パウロはきっと疲れていたでしょう。足も痛いし、お金もありません。アテネで見た偶像礼拝の光景が、まだ頭から離れず、パウロを悩ませました。コリントに到着して、町のふしだらで放縦なさまを目の当たりにし、精神的な大打撃を受けたはずです。この世の罪を見つめると、どうしても憂うつになります。パウロはさらに、会堂のユダヤ人とも衝突しました。彼の言葉を喜んで受け入れてくれるはずの相手と対立したのです。

先週の学びにもありましたが、(ヨハネ第一4:18)「完全な愛は恐れを締め出します。」まさにそのとおりです。パウロはイエスの完全な愛を確かに知っていました。とは言え、墮落した世に生きる人間ですから、パウロでさえ神の完全な愛に焦点を合わせられないこともあったのでしょう。そんな時、落ち込んだパウロのもとに主が来られ、励ましてくださいました。使徒18:9-10「18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。『恐れるな。語り続けよ。黙っているな。18:10 わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。』」



パウロが落ち込んであきらめる寸前だったからこそ、主がこのような幻を与えられたのだと私は思います。パウロが語るのをやめようと思っていたのでなければ、「語り続けよ」とはおっしゃらなかったでしょう。先ほど読んだ個所にありましたが、このすぐ後にパウロは襲われて、地方総督ガリオンのもとへ連行されます。しかし、主が前もって、パウロに危害は及ばないと約束してくださっていました。事実、暴力を受けたのはパウロを訴えた人でした。

10節は3つの部分からなります。(1)主がパウロとともにいてくださる。(2)主がパウロを危害から守ってくださる。(3)主の民がこの町にたくさんいる。主がともにいてくださるという約束は私たちに常に与えられていますが、ここでパウロはさらなる約束のことばをいただいています。守ってくださるという言葉と、コリントでの働きが大きく実るという約束です。また、主は新しい友であり働きの同労者としてアキラとプリスキラをパウロに与えてくださいました。

パウロはコリントに一年半滞在しました。その間、多くの人々が信仰を持ち、罪の救いはイエスにあると信じるようになりました。コリントでの働きは容易なものではありませんでした。パウロが書いたコリントの信徒への手紙を読めば、そこに多くの問題があったことは明白です。けれども、そこには実りがあり、新しい友が与えられ、主に感謝すべきことがたくさんありました。

まもなくコリントに教会が生まれました。よそからコリントに来たアキラとプリスキラ、シラスとテモテに加え、町で新しく信徒になった者たちがいました。ティティオ・ユストは、教会を自宅に迎え入れました。会堂長のクリスポは、一家そろって信仰を持ちました。そして多くのコリント人が信じて洗礼を受けました。コリント第一1:1の挨拶によると、ソステネも信徒になりました。クリスポの後継として会堂長になった人です。パウロに対する訴えをガリオンに退けられ、法廷の前で殴られたあのソステネです。

後にパウロは、コリントの信徒への手紙でこう語っています。コリント第一15:58「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」パウロはきっと実体験から語っていたのでしょう。コリントで、パウロは憂うつに打ち勝ちました。神のことがらに焦点を合わせ、主に仕えることによってそうしたのです。主に仕えるなら、その働きを神が御国のために用いてくださると確信できます。これは私たちに生きる意義を与えてくれます。どんな困難に遭っても、その努力が無駄でないとわかるからです。主に心を尽くして仕えるなら、私たちも憂うつに打ち勝つことができます。そうすることで、自分の悩みばかりに思いを向けるのではなく、神と人とを愛することに心と思いを集中できるからです。イエスのもとへ近づくなら、改めて主の愛に触れます。新たな喜び、新たな希望、そして素晴らしい平安を得ることができます。



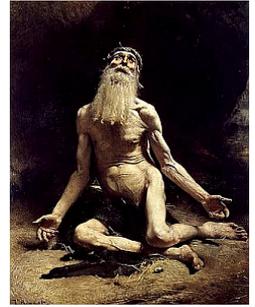
憂うつとの戦いなど厳しい試練を経験する神のしもべはたくさんいます。いくつか例を見てみましょう。民数記11:14-15で、モーセは神に向かって叫びました。「11:14 わたし一人では、とてもこの民すべてを負うことはできません。わたしには重すぎます。11:15 どうしてもこのようになさりたいなら、どうかむしろ、殺してください。あなたの恵みを得ているのであれば、どうかわたしを苦しみに遭わせないでください。」モーセはイスラエルの民を導くという重責に、死を望むほど悩みました。



エリヤもそうです。信じられないような奇跡をもって、バアルの預言者たちに勝利した直後、エリヤは逃げて隠れました。イゼベルの報復を恐れたからです。列王記第一19: 3-4には、事の成り行きが記されています。「19:3 それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、19:4 彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。『主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。』」ここでもまた、主の偉大なしもべが死を望むほど落ち込んで

います。

ヨブもいました。ヨブは、すべてを失い、私たちが経験したこともないような苦しみを受けました。ヨブ記3:1-4にはこうあります。「**3:1** やがてヨブは口を開き、自分の生まれた日を呪って、**3:2** 言った。**3:3** わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。**3:4** その日は闇となれ。神が上から顧みることなく光もこれを輝かすな。」自分など生まれなければよかったと思うところまでヨブは行ったのです。



IV. 結び

私たちはどうでしょう。失望や憂うつに悩んでいる人もいるでしょう。世の中には悪があふれていて、私たちは落ち込むこともあります。でも、あきらめないでください。世の始まりから、神の民は厳しい試練に耐えてきました。その人たちの話をどうか読んでください。私が挙げた聖書箇所を開き、その後どうなったか読んでください。パウロは落ち込んでいましたが、主が彼を元気づけてくださいました。モーセは民を導く重責に圧倒されていましたが、主はモーセの叫びに答えて、働きを補助する70人の長老を授けてくださいました。エリヤは死ぬつもりでしたが、主がエリヤのもとに来て、静かにささやきかけてくださいました。そして、エリヤはひとりではない、主がイスラエルに7,000人の人を残していると言って安心させてくださいました。ヨブは信じられないほどの苦しみを受けましたが、神は失ったものをすべて二倍にして返してください、ヨブを回復と希望の象徴としてくださいました。

主の愛は完全であり、永遠に続きます。この神が、私たちの失われた年月も失われたものもすべて回復してくださるのです。意味や目的のない試練はありません。試練について、ペトロ第一1:7はこう語ります。「あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたりますのです。」

主に仕え、神の栄光と御国のために労することには、意義と大きな祝福があります。あきらめずに耐え忍ぶなら、必ずや乗り越えられるでしょう。主がともにいてくださるからです。忠実に仕えるなら、きっと実を結びます。主がしもべの働きを祝福してくださるからです。

正しい食生活、十分な睡眠、日光浴や適度な運動は、どれも憂うつを吹き飛ばす助けになります。薬やカウンセリングが役立つこともあるでしょう。けれども、この墮落した世における落胆や失望を撃退するもっとも効果的な方法は、イエスに目を向け、仕えることです。最後に、ヘブル12:1-2をお読みしましょう。「**12:1** こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたがしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、**12:2** 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。」

祈りましょう。

V. 祈り